

合戦後の両軍

北条方は、焼かれた町や城の復興に力を注ぎ、また信玄の再攻に備えるため、駿豆に配置していた兵力の大部分を小田原に引き上げた。

北条方の状況をみた信玄は、これこそ絶好の機会とばかりに、帰陣後ひと月もたたぬうちに、甲府を出発し、駿河に侵入。御殿場、山北の神繩、小山から三島をうばい、12月6日には蒲原の城を落とすなどして、一旦帰陣。翌永禄13年1月下旬には焼津の城を落とし、

ふじえだ しみず よしわら
藤枝から清水を席卷。4月から5月には吉原、ぬまづ
沼津に転戦。また8月には伊豆韮山を囲むなどの働きを続け、年来の駿河攻略を実現していった。

歴史の表舞台からは少し隠れたような三増合戦ではあったが、その後の駿河における武田、北条両者の動向をみると、なかなか重要な戦いだったことがわかる。

☆以上は、『甲陽軍艦』筆の記録を古文書で補正。

●ゆかりをたずねて

たしろじょうし はちまんしゃ
田代城址と八幡社



田代城は、北条氏の家臣内藤氏の居城で、伝承では三増合戦のとき敵の火矢を受けて焼けおち再建されることはなかったという。しかし、その守護神の八幡社は愛川中学校の裏の丘に、たぶの木に囲まれて昔を今に伝えている。

くびづか どうづか
首塚と胴塚



四千人にも及ぶ両軍の死者をどのように葬ったかは伝わっていない。志田道と町道との分岐点の丘の上を昔から首塚といっているが、こうか
弘化2(1845)年に不動尊が建てられてからは不動堂ともよばれるようになった。ほうえい
宝永3(1706)年9月に建てた傍の碑には、当時この辺に戦死者の幽霊が出没するので念仏供養したと刻んである。なお道を隔てた志田沢沿いに胴塚と呼ぶ塚がある。昭和のはじめ小刀一振が出土した。